

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter (6) 添付ファイル 【投稿1】グローバル資本主義の歴史的位相

八尾 信光 (鹿児島国際大学)

Newsletter(5)で発表された柴垣和夫「グローバル資本主義の本質とその歴史的位相」は重要な指摘をいくつも含む興味深い論稿である。同稿を手がかりに現在形成されつつある「グローバル資本主義」をどう位置づけるべきか、私見を述べてみたい。

筆者なりに再整理させていただけば、同稿中にはおおよそ次のような指摘がある。

- ①ロシア革命以後の資本主義は、「資本の論理だけでなく、社会主義の存在に影響を受ける資本主義となった。」
- ②1960年代から70年代に先進諸国で形成された「福祉国家資本主義」は「社会主義的要素を部分的に内部化した（「混合経済」）システムであった。」
- ③それが石油危機後のスタグフレーションによって限界を露呈したため「新自由主義」が台頭し、規制緩和や福祉の切り捨てなどが行われるようになった。
- ④その流れの中で米国は資本と貿易の自由化、金融のグローバル化を推進し、それを通して1990年代には産業のグローバル化＝労働力市場の間接的グローバル化を実現した。
- ⑤これによって、多国籍企業は他国の低賃金労働力を存分に利用しつつ自国の労働者への支配も強めうるようになった。それこそがグローバル資本主義の本質なのである。
- ⑥だがそれに伴う格差や社会的緊張はいずれ福祉国家（社会）局面への回帰をもたらすに違いない、そのための武器として国民主権や社会権的基本権は維持されているのである。

以上のような説明に筆者はほぼ全面的に賛成であるが、グローバル資本主義の位置づけについてはもっと大きな観点からの位置づけが必要であるように思われる。

後期封建社会における社会の変容が「封建制の論理」だけでは説明できないのと同様に、後期資本主義社会における社会の変容も「資本の論理」だけでは説明できない。この変容は資本主義システムを批判し克服しようとする要因の発展によってこそ説明しうるのである。この点で筆者は宇野弘蔵氏や柴垣氏の捉え方に賛成である。

資本主義システムの変容を促した要因は、柴垣氏も指摘しているように、広い意味での民主主義の発展である。社会主義国の出現は中でも最も衝撃的な出来事と位置づけるべきものであろう。資本主義は形式的には自由と平等を認めるが、実際には資本による労働の支配と搾取を含んでおり、放置すれば所得や資産の不平等を無限に拡大させる。これに対して、近代民主主義はすべての人間の社会的な自由と平等を求める思想・運動・制度であり、社会主義とはラディカルな民主主義にほかならないから、民主主義の発展は資本主義システムへの批判と、修正・是正・克服要求を増大させずにはいない。それこそが、古典的資本主義を修正資本主義に変容させたのである。

1989年を境にソ連型の社会主義体制は崩壊し、その影響を受けて先進諸国の福祉国家システムは厳しい見直しを迫られているが、それによって修正資本主義のシステムが解体されてしまったわけではない。修正資本主義システムの市場主義的再編が生み出した格差や貧困等の諸問題はいずれ必ず克服されていくであろうが、それを促すものは柴垣氏も示唆しているように広い意味での民主主義の発展であろう。

【投稿 2】宇野三段階論の再構成（概要）

新田滋（茨城大学）

十年前、わたしはパクス・アメリカーナ段階論や中間理論の登場以降、宇野三段階論がもつ緊密な論理的体系性に関する方法意識は溶解しており、それは「純粋資本主義論と世界資本主義論との間でのようなコップの中での解体ではなく、もはやコップそのものの溶解過程」であると述べていた（拙著『段階論の研究』御茶の水書房、1998年、484頁、参照）。

今回、横川信治氏から宇野弘蔵没後三十年記念研究集会における議論について、その後、十年たつてどのように考えているか述べてみないかのご依頼を頂いた。そこでこれを機会に、今までさまざまな機会に局所的、分散的に考えてきた宇野三段階論体系のさまざまな部分の組み換えを全体的に整合化させる作業に取りかかってみることとした次第である。しかし、それはやはり大変に入り組んだ作業となり、骨組みだけでも原稿用紙 120 枚程度になってしまった。以下では、その結論の概略を断定的に述べることはできないことをお断りしておきたい。

戦間期以降のいわゆるパクス・アメリカーナ期における資本主義的社会構成においては、国家の経済介入が基本的な要素となっている。したがって、純粋資本主義社会の原理論を要石とした宇野三段階論が依然としてそのままのかたちで有効であるとは考えにくい。だが他方で、混合経済とはいえ資本主義的市場経済があくまでも圧倒的な比重を占めているのであるから、宇野原理論の一定の部分、すなわち実体規定と形態規定のような抽象的な部分と金融機構・景気循環のような機構論的な部分については、パクス・アメリカーナ期においても「分析基準」として無効となるわけではない。

しかし、パクス・ブリタニカ期に特有の原理論（以下、原理論 I-1 と表記）とは異なるパクス・アメリカーナ期に固有の原理論（以下、原理論 I-2 と表記）などというものは構成できるのだろうか。もちろん、これについても、従来の宇野三段階論の枠組みでは、国家の経済介入とそれによる循環的法則性の攪乱という理由によって否定されてきた。しかし、時間幅を今日まで拡張して観察してみるならば、独占・寡占構造もアウトサイダーからの競争によって崩壊しうるし、また、ケインジアンであれマネタリズムであれ誤ったマクロ的な財政・金融政策は結局のところ現実によって補整されざるをえなかった。その意味では、独占・寡占構造が存在しても、あるいは家計、企業とともに政治審級における政府・国家が経済審級に作用したとしても、結局のところ循環的法則性に規定されてしか経済過程はありえないのである。そのことを明らかにするものとしてパクス・アメリカーナ期に固有の原理論—経済審級・政治審級・イデオロギー審級の相互作用としての—を構成することは可能ではないだろうか。

しかし、そのようにするときには、パクス・ブリタニカ期とパクス・アメリカーナ期のそれぞれに固有の原理論 I-1,2 の層に共通する原理論 II の層を、より抽象度の高いレベルに設定しなければならないであろう。そのような論理的操作はさらに、必ずしも資本主義的社会構成に限定されない共同体と共同体の間に始まるあらゆる市場経済に共通する経済法則的な流通形態の原理論の層（III）、あらゆる／ほとんどの社会に共通する経済原則的な原理論の層（IV）を、それぞれ仕分けして設定し直す必要を生じさせるであろう。

すなわち、原理論は、I = パクス・ブリタニカ期とパクス・アメリカーナ期それぞれの資本主義社会構成に固有の経済法則的な層、II = 双方の資本主義的社会構成に共通する市場機構の多様

な展開としての拡張された経済法則的な層、Ⅲ＝共同体と共同体の間にはじまるあらゆる市場経済に共通する経済法則的な流通形態の原理論の層、Ⅳ＝あらゆる／ほとんどの社会に共通する経済原則的な原理論の層（これにはさらに、Ⅳ-1.労働・生産過程、Ⅳ-2.効用最大化・費用最小化行動原則、Ⅳ-3.制度生成過程の三つの側面がある）、という四つの層をからなっている。従来の宇野原理論においては、これら四つの層がいわば、Ⅰ-1 という単一の層のうちに体系的に折り畳まれる論理的操作がとられてきたのである。

以上のように四つの層を区別することによって、狭義の宇野原理論はパクス・ブリタニカ期に保存=封印されることになる。と同時に、再定義された原理論体系はさまざまな社会構成および小段階の本質規定、分析基準として大きな有効性をもつようになるであろう。

河村哲二氏や小幡道昭氏は、パクス・ブリタニカ期の三つの小段階を対象とした宇野三段階論と論理必然的に結びついてきた純粋化傾向論・方法模写説という宇野の方法論そのものを棄却し、かつての鈴木・岩田説（その内の特に移行必然性論）に近いたちで原理的資本主義像の自己変容ないし制度生成という考え方をとろうとしているようにみえる。

私自身も（移行必然性論はともかくとして）、原理論にミクロ的な制度生成論やマクロ的な傾向（趨勢）的变化論のレベルが存在すること自体は明確化する必要性を感じてきたが、それは原理論Ⅳ-3 のレベルに位置づけられるべきであると考えに至った。その意味では、私自身も、横川氏の整理による、「(4) 資本主義の自己再生能力の強さを認め、複数の自律的な資本主義像を認める。原理論は多様な資本主義像の関係を理論的に明らかにする。」という立場になるであろう。しかしながら他方で、原理論はⅠ～Ⅳの諸層からなるものとして体系的なのであって、それぞれの層を恣意的に取り出して、そのうちのどれかだけを原理論体系として固定化すべきではないと考えるものである。

すなわち、あらゆる／ほとんどの社会に共通する〔原理論Ⅲ・Ⅳの諸層－さまざまな社会構成発展段階とその各小段階の類型論〕からなる歴史=社会=制度理論、パクス・ブリタニカ期に固有の〔原理論Ⅰ-1－小段階論－現状分析〕からなる宇野三段階論、パクス・アメリカナ期に固有の〔原理論Ⅰ-2－小段階論－現状分析〕からなる三段階論というように、体系構成は組み換えられることになるであろう。それと同時に、パクス・ブリタニカ期を基準として独自の方法的意義が込められている宇野三段階論および原理論は、パクス・ブリタニカ期に固有の方法的体系として保存=封印されることになるのである。

しかし、より重要な論点は、社会構成論・小段階論および現状分析の領域を具体的に再構成することにこそある。すでに紙幅は尽きてしまったが、社会構成論・小段階論については、方法的諸問題の整理、パクス・アメリカナ期における現代資本主義の主要な諸要素の位置づけ、パクス・アメリカナ期の小時期区分等が検討課題となる。また、世界－各国／日本資本主義の現状分析の方法的論については、宇野による日本資本主義論の画期性と限界を再確認しつつ、従来の宇野理論においては不十分にしか取り扱われてこなかった諸要因を、①資本主義的社会構成の共通性格、②世界資本主義システムにおける中心（一半中心）－半周辺－周辺の共通性格、③東アジア型社会構成の諸特徴、④日本列島上の社会の諸特徴、⑤近代日本の後発的資本主義化が行われた世界的タイミングによる諸特徴、の五つの層に分けて探究することが課題となるのである。

（2008年3月3日）